

会長挨拶

日本顎口腔機能学会 会長

山口泰彦

(北海道大学歯学研究院口腔機能学分野  
冠橋義歯補綴学教室 教授)

2018年4月から今期の会長を務めさせていただいております山口でございます。

本会は、1982年に前身の下顎運動機能とEMG研究会が発足し、当初は日本ME学会専門別研究会という位置づけでした。その後、1986年に顎口腔機能研究会と改称し、1993年に日本顎口腔機能学会として発足しております。

ご存知のように咀嚼、嚥下、発音など、顎口腔機能の維持、あるいはその障害からの回復は、健康な生活に欠かせない重要な事項です。本会はそのような顎口腔系の諸機能に関する基礎ならびに臨床の真理を探求し、その進歩発展を図ることを目的として、活動を続け、多くの実績を残してきました。

顎口腔機能は歯科領域全体の根幹をなすものであり、生理的な状態から障害の生じた病的な状態まで幅広く理解する必要があるため、基礎研究から臨床領域まで、歯科、あるいは隣接医学の多くの専門領域が関わっております。また、顎口腔機能は非常に複雑な機能であり、その解明や臨床における機能評価を的確に行うためには、種々の解析機器、検査機器の発展を必要とします。本会には、歯科補綴学、歯科矯正学、小児歯科学ほか多くの臨床系領域、口腔生理学などの基礎系領域、さらには本会が日本ME学会専門別研究会としてスタートしたことからもわかるように工学系の領域など多様な専門領域の研究者が会員として参加しており、まさに学際的な活動を行っております。

多様な専門領域の会員が領域の垣根を越えて情報を共有し、研究を発展に導くために、学術大会では発表15分、質疑応答15分というスタイルをとり、徹底的にディスカッションを行うことができるようにしています。これは第1回の下顎運動機能とEMG研究会から引き継がれている本会の伝統と言えます。

また、学際的な会員構成による徹底的なディスカッションに加え、本会には若手研究者育成にも力を入れてきたという伝統があります。これまで、多くの若手研究者向けのセミナーを企画し、最近隔年で、2泊3日の宿泊セミナーを行っております。セミナーでは座学とともに、研究の立案や研究手法を身に着けるため、実際の研究テーマの実験を行い、最終日には実験の成果をグループごとに発表するというワークショップを行っております。また、若手の発表に対し学術大会優秀賞を設定し、さらにその受賞者達が学術大会でシンポジウムを企画できるようにするなど、若手研究者が積極的に学会に参加できる体制がとられています。

一頃、歯科における研究の潮流が機能系から他の領域にシフトしてきているとの声が聞こえていました。しかし、近年、健康の維持、増進における口腔機能の重要性の理解が高まり、臨床においては口腔機能を的確に評価できる検査法の必要性が認識されてきております。本学会の活動の重要性が益々高まってきた時代と言えますので、今後さらに活発に学会活動を行い、その成果を基に社会に貢献していかなければならないと思っております。皆様におかれましては、ご理解とご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

2018年4月